

「立正安国・お題目結縁運動」期間における 宗門寺院を取り巻く社会現象の予測

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

野村環右

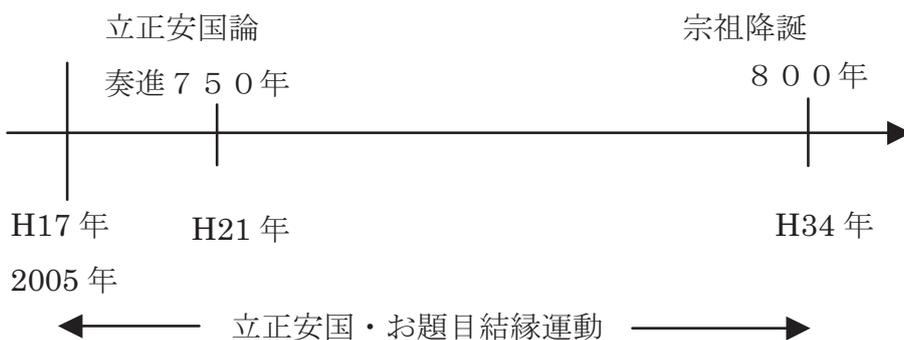
【初めに】

立教開宗七五〇年慶讃「お題目総弘通運動」が円成し、新しい宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」が、平成十七年四月よりスタートした。この運動は、平成二十一年の『立正安国論』奏進七五〇年を経て、平成三十三年の宗祖御降誕八〇〇年の翌年、平成三十四年度をめぐとした十八年間にわたる長期の運動である。

ただ、一口に十八年間といっても、宗門寺院を取り巻く環境は、日々刻々の変化にさらされるであろう。特にキーワードは、「少子・高齢化」である。

このことを予測し、足腰の強い、寺院運営・布教に努めたいものである。今後三十年は、葬儀をしなければいけない人口が増え続ける。

総人口は一億二八〇〇万人と平成十七年頃までは、微増の頂点に達するが、高齢者人口の高齢化率は増え続け、平成五十七（二〇四五）年には三十五%を超える。



(a) 今後の葬儀は、増え続ける。

- ・自治体の葬儀場としての稼働率はあがる。
- ・葬儀式より、告別式として、宗派の特色よりお別れの式の要素が強くなる。
- ・葬儀は増えるが、さまざまな形式になる。

(b) 葬儀の小規模化が増える。

- ・ごく一部の富裕層や社葬などを例外として、少子化の為、子供が少なく、今までの規模より簡素化された葬儀となる。
- ・都市の中心地よりドーナツ化現象で住宅地が遠距離となり、地域のコミュニケーションに入らず、個室化した葬儀となる。
- ・葬儀費用を減らす事で、近い親戚づきあいもしくなくなり、ファミリー葬となる。

(c) 寺院・菩提寺不要の葬儀が増える。

- ・人口密集中（高齢者密集中）、主に、寺院の少ないニュータウンでは葬儀が集中する為、僧侶不足となる。葬儀業者紹介の御布施の安い寺を持たない在宅僧侶（マンション坊主・アパート坊主）が大量発生する。
- ・菩提寺に黙って葬儀をし、勝手に法名をつけ、納骨だけに平然と来寺をし、トラブルとなる。
- ・俗名で告別式をする。法名不要、この頃になると葬儀意識が多様化。

(d) 施主が檀家制度を拒否する。

- ・葬儀は寺に依頼するが、檀家にならない。特に公園墓地、村落墓地所有者。
- ・世間体を考え、一周忌もしくは三回忌まではするが、後は放ったからし。
- ・葬儀費用を見積もりし、他の寺院と比較し、安い寺とのつき合いをする。
- ・自分達は無宗教なので、棚経・墓経は結構ですと、寺院からのアプローチを拒否する。

(e) 墓地不要論者が多数出現

- ・村落墓地・村墓・寺院墓へ都市圏の分家からの遺骨が集まりだし、各家一墓地に集中埋葬される。
- ・墓地を広くしないで多くの遺骨が集まるので、超少量の処理となる。
- ・高度成長期に大規模造成された公園墓地の所有者子孫は、参拝意識が減少し、管理費未納の墓地は法的手段で縮小・廃止となる。
- ・一寺院墓地は、ステータス的な墓地・ブランド寺の墓地以外は、少子化により参拝が減少し、無縁墓が増える。

(f) 「少子高齢化」

- ・ニート・フリーター等、経済的弱者が施主となり、葬儀は小規模で、納骨は兄弟によって既存墓へ埋葬。
- ・子供なし夫婦の増加による施主無し葬儀が増える。継承者なしの墓も増える。
- ・一人娘が嫁にいく、もしくは一人息子の養子が増え、夫婦一組で、二組の両親の葬儀をする。故に、葬儀の小規模化へ。

- ・葬儀不要な家族が増加する。希望により、死体処理専門業者が老人ホームや施設から遺体を引き取り、火葬後に遺骨を戻す。なお、墓所なしの遺骨は合同墓に埋葬される。

- ・福祉団体の老人に入居時に葬儀代を含めてまるがかりで無宗教、もしくは特定の宗派のみの合同葬を申し込む。

(g) 仏教不要・宗教不要論

- ・檀家のメリットなし、護寺会費を未納とする半檀家が増える。

- ・僧侶寺院とのつき合いを極端に嫌う。先祖は檀家だったが、俺や嫁は承諾してないよ・・・

- ・信仰生活より現実の物質追求、拝金追求の生活に追われて自己の宗教感の喪失。

- ・生活の安定と、娯楽や趣味・レジャー優先が当たり前となる。

- ・公共施設の充実、社会基盤の整備、葬儀社施設の充実により、寺の伽藍に集う機会が極端に減り、寺の必要性まで疑問視する。

- ・寺からのアプローチを完全に無視して、都合の良い事があった時だけ来寺する。

(h) 一般日蓮宗寺院の取り巻く環境

- ・一部の時代迎合の住職・寺院による組寺の離脱、相互扶助制の崩壊

- ・優等寺院の完全世襲化で、宗門内教師のあきらめと、人員交流の動脈硬化。

- ・言説布教、修法布教、社会参加等の積極寺院が生き残り、旧態然の檀家の法事・葬儀であぐらをかいていた寺院の凋落の二極化。

- ・大型専門店型のブランド寺院より、コンビニ型の何でも便利な住職のいる小型寺院にも生き残りの活路あり。
- ・寺を持たない教師の数だけは増え続け、葬儀屋に月給をもらう専門職のホール葬儀、ホール法事、墓前法事が増加する。旧来の優等寺院への逆襲。
- ・今までタブー視された小寺院どうしの合併、統廃合が現実化する。
- ・女性教師、女性住職が増える。特に夫・住職が遷化しても、優等寺院も寺庭婦人が教師となる現象が多くなる。女性宗会議員も多数出現する。
- ・家の宗教より、家族の宗教、個人の宗教へと変化する事より、魅力のある住職、力のある修法師や霊断師のいる寺院が発展する。

(i) 寺院から見て予想される異常なこと。

- ・男女別姓の制度定着により、夫は日蓮宗、妻は浄土宗の実家の墓へ埋葬。
- ・結婚式場から葬儀会館への業務転換へ。
- ・設備不備の寺院は離檀が相次ぐ。
- ・子供が高校・大学を卒業すると、平均世帯数二人時代はすぐにやってくる。
- ・賽銭するより貯金、と老人の意識の変化。
- ・所得額減少、国民総中流意識からほんの一部の富裕層と大部分貧困層と貧富の差が急拡大。
- ・全体的に葬儀は増えるが、法事をきちんとする施主（檀家）が減少。
- ・葬祭業者主導の葬儀・法事の価格破壊。
- ・現在の老人世代の子育て・情操教育の失敗の結果、「信仰の相続はしないが、遺産相続は争ってでもする」故

に、親族仲たがいで不満な家は離檀する。

・一部の攻撃的な新興宗教団体の指摘で、教義教学知識不足の僧侶が公開される。

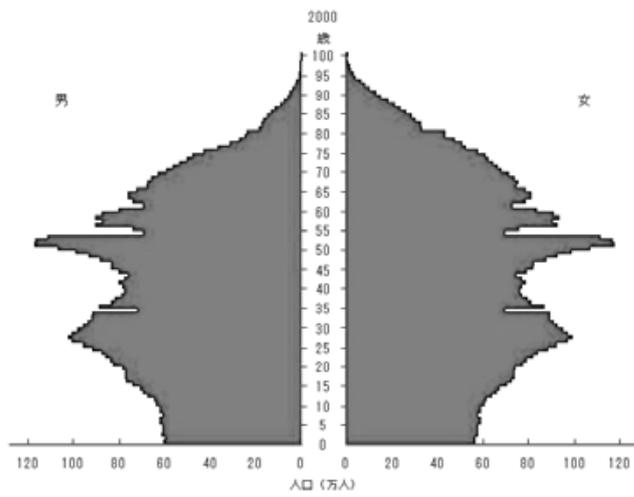
【おわりに】

現在、日本は少子高齢化社会にまっしぐらに進んでいる。

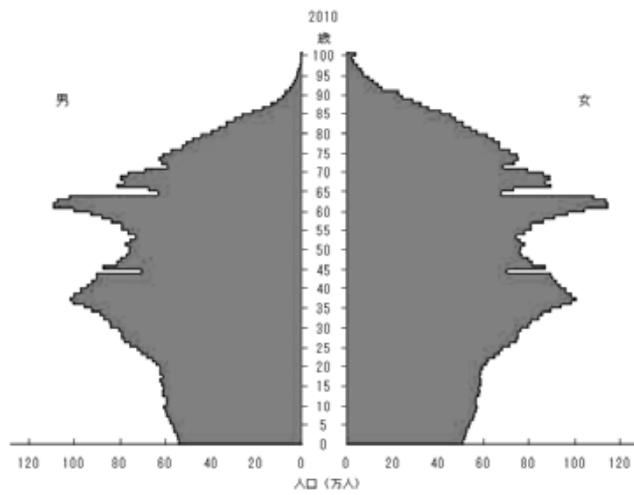
宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」はその社会化現象の真っ只中に展開されるわけである。

一見、葬儀・法事が増え、宗門各寺院は右肩上がりで経済的な余裕が出てくると考えられる。しかし、楽観、油断は出来ない。「ユダガエル」のように寺院を取り巻く社会環境は厳しさを増してくるだろう。現在より、十年・二十年・三十年・五十年・百年の計をはかり、宗門全体で知恵を出し合い、布教チャンスの機会を逃がさず、お題目の結縁を根付かせ、布教活動にまい進しなければならない。

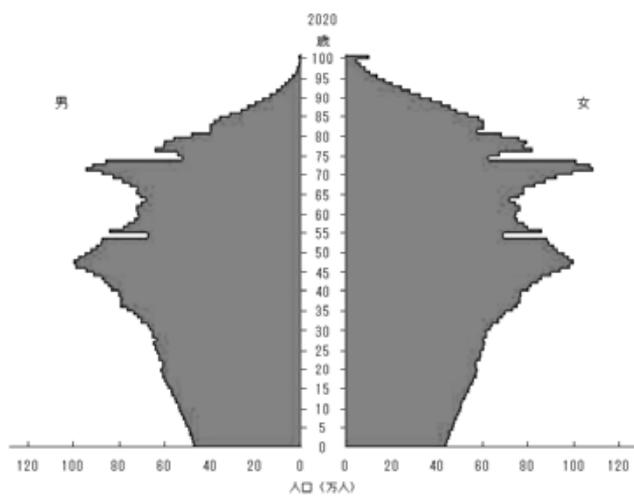
これより十年、団塊の世代が退職期を迎える。ひと昔なら、自然にお寺へ足が向き、寺運営に協力的な世代として寺の中心となってくれたのだが、今後、健康長寿の老後二十〜三十年世代に、お題目信仰の時間を使ってもらわなくてはならない。非日常のありがたい空間を、宗門寺院は提案しなくてはならない。



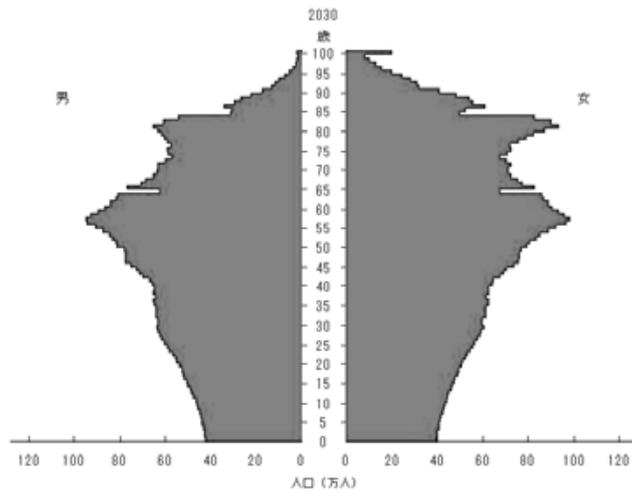
作成：国立社会保障・人口問題研究所



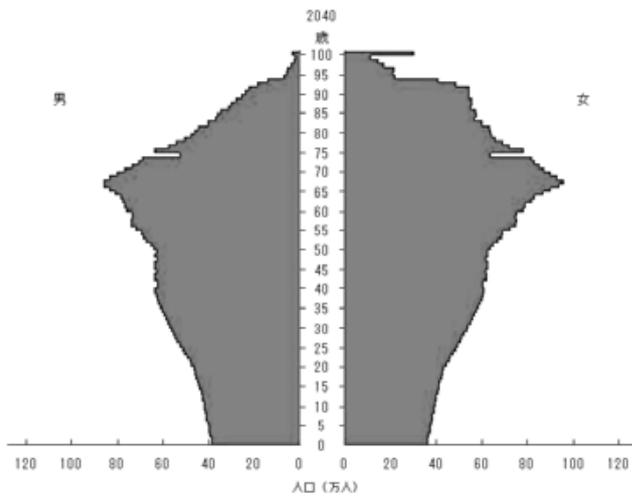
作成：国立社会保障・人口問題研究所



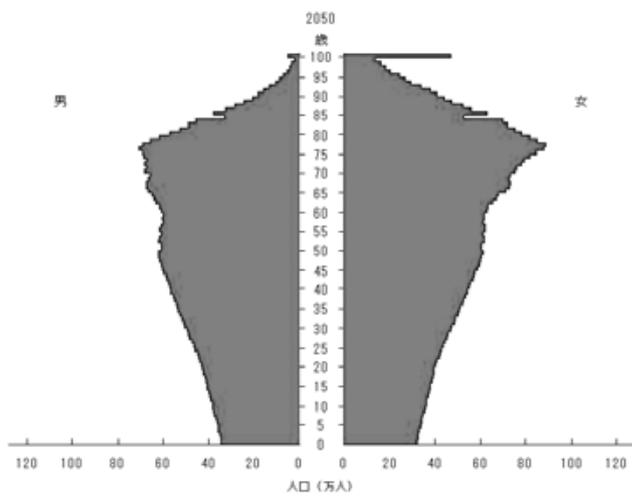
作成：国立社会保障・人口問題研究所



作成：国立社会保障・人口問題研究所



作成：国立社会保障・人口問題研究所



作成：国立社会保障・人口問題研究所